The Vines

Interview : 粉川しの　Translation : 岩田桃子　Photograph : CYBELE MALINOWSKI

ザ・ヴァインズ、傷だらけの10年を昇華した最新傑作

このアルバムにはこれまでにないオーヴァーダブやサウンド・エフェクトも入っているんだよ。あと、今すでに新作に取り掛かっているんだけど、これもまた今までとは全く違う作品に仕上がっているんだ。メロウでのんびりとした感じでね」

●本作は『メロディア』から3年ぶりの新作です。『メロディア』をリリースしてからしばらく経った頃、これはあまり振り返りたくない記憶かもしれませんが、あなたは病気で再び療養に入ることになりましたよね。あれから3年、この素晴らしいアルバムを作るまでにどんな紆余曲折が？

「えーっと、まずちょっと休みを取って……かなりクレイジーな状態になっていたからね。それで少し休んでから、また曲を書くようになって、デモを作って、そうやってゆっくりと戻っていった感じかな。でも、自分の中では音楽から休みを取ったとか、曲作りをストップしたとか、そういう風に感じたことはないんだ。それこそ、ファースト・アルバムを作る前から、常に曲を書いてアルバムを作りたいと思ってきたし、だから、音楽を作って曲を書くこと自体が僕の人生なんだよ。確かにツアーは僕にとっては、かなりキツくて、クレイジーになってしまうときもあるけど、でもだからと言って、曲作りやレコーディングはやめたいと思ったことはないんだ。それに、今はまたライヴを再開して、すごく楽しめているし。だから、またこの調子で続けていければなと思ってるんだよ」

●本作の曲作りのスタート地点でどのようなコンセプトを想定しました？

「今作はこれまでと違って宇宙的な、そういうサウンドがいいなと思って……当初は静かな音楽を聴いてたんだ。それからヘヴィなバンドに移っていって、その後60年代のバラードとかをよく聴くようになっていったんだよね。アルバムは……かなりの数の曲が書き上がっていたから、そこから自分達でも一番気に入ったもの、あとアルバム全体として、いろんなサウンドが楽しめるような、そういう曲を選んでいったんだ。今作は、未来的なロックというか、未来的だけど、なおかつ原始的でシンプルな、そういう音の組み合わせを目指したんだ」

●私がこのアルバムがすごいと思う点の1つは、楽曲ごとにパンクやサイケデリック、ロックンロールにフォークとくるくる表情を変えるのに、それらすべてのナチュラルな調和、統一感を感じるところなんです。

「そう言ってもらえて、すごく嬉しいよ。自分達でも曲それぞれの仕上がりにはすごく手応えを感じていたから、あとは曲順だけだということで、かなり気を遣ったつもりだし。それと、やっぱり僕のヴォーカルが全体を繋げているんだと思う。ただ言われた通り、今作にはいろんなスタイルが入っているけど、一番大切なのは原曲の良さで、それも全体としての統一感を生んでいるんじゃないかな。特に思い入れがあるのは"フューチャー・プリミティヴ"かな。当初はすごくシンプルな形だったんだけど、それを後からどんどんいじって、ギターを引っ張り出して、エレクトリック・サウンドを加えていったんだよね」

●今年はヴァインズのファースト・シングル"ファクトリー"がリリースされてから10年の節目になりますよね。この区切り感は意識していましたか？

「いや、今言われて気付いたけど、確かにそうだよね。あのシングルは2001年にリリースされたから……というか、すごいな、うん。嬉しいし、こうやって今作を出すのにぴったりのタイミングだよね。いや、かなりいい気分だよ。自分ができることをやっていくしかないし、今もこうやってバンドが続いていて、音楽に取り組めていることが本当に嬉しいんだ。今回は、前作のツアー時や、『ウィニング・デイズ』の頃よりも、はるかに調子がいいんだ。今考えると、あのときはやっぱりツアーを回るには最悪のタイミングだったと思うんだよね。でも、今回のツアーはすごく良いものになると思うよ。自分なりにライフスタイルを根本的に変えたんだ。もっと自分に責任を持とうと決めたのと……あと、セミプロ意識を持って取り組んで……真面目になるというわけじゃなくて、今回はツアーやショウは絶対にキャンセルしないつもりなんだ。バンドを始めた頃は、僕にとってライヴはただクレイジーなだけで、正直何がなんだかわかってなかったんだけど、最近はお客さんに最高のショウを見せようといろいろ考えるようになったんだよ。それに、僕のヴォーカルも、今はちょっと風邪を引いてるけど、ここ数年すごく良くなったと思うし、その分、オーディエンスにきちんと届いている気がしてるんだよね。日本にも今年後半には行く予定だけど、今回はキャンセルということには絶対にならないし、良いライヴを保証するから」

●何が一番変わったのかな？

「うーんと……クリーンになったから、かな(笑)。そのおかげで、そうやってショウだったり、いろんなことに取り組めるようになったんだよ」

●そう聞けて、良かったです(笑)。アルバムの話に戻りますが、『フューチャー・プリミティヴ』、これってすごく良いタイトルというか、ファンとしても嬉しくなるタイトルなんですけど、最後にこのタイトルに込めた想いを訊かせてもらえますか？

「まず、曲が先にあって、いざアルバム・タイトルを考えるときになって、ぴったりだなと思ったんだよね。未来的で、ロックで、同時に昔っぽい感触もあって、よく考えると、アルバムのテーマもその通りだなと思ったんだよ」



ザ・ヴァインズ、満身創痍のカムバック作かと思いきや、新作『フューチャー・プリミティヴ』はちょっとびっくりするほど健やかな名作、前向きなヴァイブに満ちたヴァインズの新章となっている。前作『メロディア』のツアー中に再発したクレイグの病は一筋縄では治癒しない困難さを改めて痛感させられたし、実際問題、今なお彼が完治したかどうかははっきりとわからない。しかし、3年ぶりの新作となる本作には、そんな自分自身のありのままを受け入れて、それでも音楽をやれている今の自分の人生を思いっきり祝福せんとする逞しさに満ちている。『ハイリー・イヴォルヴド』の美点と『メロディア』の美点、つまりヴァインズの常にキーであり続けてきた破壊のパンクと永遠のメロディが、絶妙のバランスで互いを引き立てている。のっぴきならない状態に何度も陥り、何度も中断を余儀なくされてきたヴァインズの10年間の歩みが、ここで改めて一本の線で繋がれたような感慨を覚える作品なのだ。久しぶりのクレイグに話を訊いた。

●『フューチャー・プリミティヴ』、このアルバムは本当に素晴らしいです。初期のヴァインズのノイジーでパンキッシュな勢いと、中期以降のヴァインズの冴えたメロディ、温かなメロディが合致した、ヴァインズの集大成とでも言えそうな作品ですね。

「今作の仕上がりには、自分達でもすごく満足してるんだ。今回はバンブルビーズのクリス・コロナをプロデューサーに迎えて作ったんだけど、すごく楽しんで取り組めたんだよね。バンブルビーズはダンス・ミュージックを作っているバンドで、クリスはそうした要素を今作のロックンロール・サウンドに持ち込んでくれたんだ。だから、今作はこれまでのヴァインズの集大成みたいなアルバムだという指摘がわかる一方で、



ブラック・アンド・ホワイト・アメリカ
／レニー・クラヴィッツ
WPCR-14184（ワーナー）¥2,580　8/24

■代表曲候補を多く含んだ大怪力作

20年籍を置いたヴァージンから離れてロードランナーからのファースト・リリースとなる3年ぶりの新作がレニー・クラヴィッツの本作だが、これが久しくなかった珠玉のトラックだらけの本当に素晴らしい出来。もともとレニーはソングライターとして達人といってもいいので、どのアルバムについても実は楽に曲が書けてしまって却って詰めの甘い作品を作ってしまうこともあるのかもしれないが、今作はどの曲もかなり練り上げ、さらに多様性にも富んだ充実した内容になっていて、レニーの音楽性の拡がりを標した98年の『5』をどこか彷彿とさせて感動的。70年代末から80年代にかけてのファンクをインスピレーションにしたトラックが多く、特にタイトル曲などはクインシー・ジョーンズ的に超スリックなファンク・サウンドを見事に形にしつつ、「ブラック・アンド・ホワイト」を背負ってきた自身の生い立ちを生々しく綴るポスト・オバマ的なテーマを孕んだ名曲で、間違いなくレニーの代表曲となる曲。個人的にはマーヴィン・ゲイ風メロをカーティス・メイフィールド的に歌い上げる〝リクウィッド・ジーザス〟にしびれた。　**高見展**

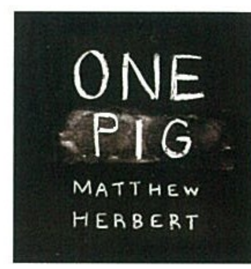


フューチャー・プリミティヴ
／ザ・ヴァインズ
SICP-3226（ソニー）¥2,310　8/24

■ヴェテランなんかになるか

宣伝に〝奇跡の復活〟の文字が躍るが、確かに日本公演キャンセル、フロントマンのクレイグ・ニコルズの不調を思えば奇跡という言葉を使いたくなる気持ちもわかる。ホワイト・ストライプスらと共にガレージ・リヴァイヴァルの旗手と注目されたのがもう10年も前となるが、そんなヴェテラン感とは無縁とばかり思いっきりの叫び声で幕を開ける5枚目だ。

前作はデビュー作をやったロブ・シュナフをプロデューサーにヴァラエティに富んだ内容だったが、今回はバンド仲間のクリス・コロナをプロデューサーによりコンパクトにまとまった世界を聴かせる。ガレージ色の強いものからポップなアンサンブルを素直に聴かせるナンバーと今回も前作に負けず劣らず幅広いのだが、1曲ごとの突き詰め方がさらに深くなり、かなりぶっとんだミックスをやっている曲もあったりして気持ちいい。とくにサイケデリック・ナンバーはいつも以上に混沌度を増し、ポップな持ち味との混ざり具合が聴きどころ。アコGの弾き語りナンバーはかなり情緒不安定な感じでちょっと心配になったりもするが、そこを突き抜ける勢いもしっかりとあるので大丈夫だろう。　**大鷹俊一**



ワン・ピッグ
／マシュー・ハーバート
HSE-30273（ホステス）¥2,490　8/24

■なぜ豚なのか？

ドミューンでのぶっとびモノのプレイで日本中を驚倒させた奇才マシュー・ハーバートの連作シリーズ『ワン』の最終作は、一匹の豚の誕生から死までを追ったコンセプト・アルバム。実際に豚を飼う農家に出向き、さまざまな音を拾ってきて、それを元にさまざまなエレクトロニクス処理を重ね、作品に仕上げている。PETA（国際動物保護団体）からクレームが入ったというが、歌詞が一切ないアブストラクトなインストゥルメンタル集で、音自体になんらかの具体的なメッセージや情報があるわけではない。なので解釈は聴く者に委ねられている。

これまでの『ワン』も、さまざまな現実音のサンプリングを元に作られたコラージュ作品だったが、最終的にはダンス・ミュージックとして昇華していた。だが今回はその着地点もなくなり、ノン・ビートのミュージック・コンクレート的な実験性が強まっている。なので、これまでの彼の作品らしいユーモアとかポップネスみたいなものが希薄だ。そんなわけで一般性は薄いが、ヘッドホンで聴くと、細かい仕掛けやエフェクト処理、音響彫刻の妙が確認できてかなり面白い。　**小野島大**



ユアーズ・トゥルーリー
／サブライム・ウィズ・ローム
WPCR-14152（ワーナー）¥2,180　発売中

■伝説の新バンド

ヴォーカルにローム・ラミレスを迎えた新生サブライムが、初のフル・アルバムをリリース。フロントマンのブラッドリー・ノウェルが他界してから13年の時を経て、09年にロームという新たな「声」を手にしたバンドは、ライヴでの熱い反響に押されて新曲を作るようになり、今作が生まれた。法的理由からバンド名の変更を余儀なくされたが、この名前からは新しいサブライム伝説をロームと共に作り上げていくんだという意気込みが伝わってくる。あくまでサブライムとは別バンドであると位置付けながらも、ロック、レゲエ、スカ、パンク、ヒップホップをブレンドしたサブライムのサウンドとスピリットは確かにここで生き続けている。ウィズ・カリファのラップをフィーチャーした曲や、ダブステップを取り入れた曲など、守るものは守りながら新しいものにもオープンで、未来のある現在進行形の伝説を紡いでいこうとする彼らの姿に往年のサブライム・ファンも納得するだろうし、このバンドをとおしてブラッドリーを知る新しいファンも増えていくはずだ。9月にはAIR JAM 2011出演、単独ライヴも決定して、遂に来日も実現！　**網田有紀子**



ディファレント・ギア、スティル・スピーディング　来日記念限定盤
／ビーディ・アイ
SICP-3238/9（ソニー）¥3,780　8/24

■伝説の夜をこの手に

スペシャル・ゲストとして出演するサマソニのステージ、そして9月の単独ツアーを控え、貴重映像を加えて来日記念盤としてリリースされる『ディファレント・ギア、スティル・スピーディング』。映像はプロモーション・ヴィデオが5曲、そして、震災から2日後に行われ、リアムが「日本にいるすべての人々に捧げる」と呼びかけた一幕が世界を駆け巡った、あのパリ公演の模様からなる。親密感に溢れた会場でこのライヴを、リアムを観られた客が心底羨ましい。しかし特筆すべきはなんといってもリアムから迸るピュアなロックンロール愛だ。アルバムにしろライヴにしろ、当然つきまとうオアシスとの比較は、〝フォー・レター・ワード〟でライヴが幕を開けたその瞬間に吹き飛ばされ、（その歌唱スタイルこそこれまでと変わりはないものの）表現者：リアムの純粋さに釘付けになる。アルバムで驚かされた楽曲のフレッシュさはもちろん、ギターのウォール・オブ・ノイズのなかでなお、これまでよりはるかにあの声がよく通る。件の〝キル・フォー・ア・ドリーム〟では、客席にライターの灯が点り、美しいエモーションを生み出している。　**羽鳥麻美**